回顧録・寄稿文

50th Anniversary
沖縄県消防学校

沖縄県消防学校開校50周年を祝して

元校長
漢那　宗善

沖縄県消防学校が開校50周年を迎えるにあたり心よりお祝いを申し上げます。
そして、消防学校の発展に寄与された関係者及び歴代の消防学校職員とともに喜びを分かち合いたいと思います。

私にとって、消防学校は、公務員生活の最後の職場であり、在籍した３年間、素晴らしい同僚たち（職員、教官、舎監）に恵まれ、数々の学校行事や懇親会など思い出は尽きません。教官たちが訓練指導する中での、消防の知識、礼式、安全管理の徹底、指差呼称、器具愛護、気づきの心などは、日常生活でも役立つことが多く、多くの貴重な学びと経験をさせていただきました。

初任教育では、新米消防士が、半年間の厳しい多様な訓練を経て、一人前の逞しい消防士に成長する過程を間近で見られたのは幸運であり、校長冥利に尽きました。大きな声で、互いに励まし合いながら、諦めない心で必死に消防知識や技術の修得に励む若者の姿は感動の連続でした。毎日学校内に響く大きな号令と呼称は、私の大きな活力でもありました。

また専科教育では、中堅職員や幹部職員、消防団員の皆さんと、外出日の限られた時間で酒を飲みかわし交流できたのも良い思い出です。それぞれが活動する現場は違えど、消防人としての誇りと情熱、強い団結力に圧倒されました。

その他にも、消防隊員の皆さんが日頃から学校に心を寄せてくれていることに強く心を打たれました。各消防本部が連携して、学校教育課程へ消防隊員を派遣し、行事前には広大な敷地の草刈作業や庭木剪定を行うなど協力支援体制は有難く心強く感じました。

私の一番の思い出は、大々的に学校開校40周年記念のお祝いはできなかったが、代わりに、既存の火災想定訓練施設の中に模擬消火訓練装置を導入し、各消防本部幹部及び沖縄県消防学校職員や職員OBの皆さんと一緒に竣工式をお祝い出来たことでした。竣工式後には、当時の退職される消防長を含む4人で体育館横の緑地に記念植樹を行いました。現在も２本が育っているのは嬉しい限りです。

副校長の大村現校長とは訓練施設の充実に奮闘し、大型消防自動車や資機材を新規購入しました。特に、工事現場から廃資材の提供を受け、プール隣りの敷地にガレキを積み上げた震災訓練施設が使用できるようになったことは、私の中では画期的なことでした。

結びになりますが、消防学校が消防職員の人材養成機関として、あらゆる災害に対応できる訓練施設機能を将来にわたって確保し、消防職員の心の拠り所として誇れる学校であって欲しい、また消防学校が広く県民に認知され、地域に愛される存在になって欲しいと願っています。消防学校のますますのご発展をお祈りいたします。

竣工式後の記念植樹（右が筆者）
（平成29年３月）

震災訓練施設の新設
（平成26年）

沖縄県消防学校開校50周年に寄せて

元副校長
翁長　武俊

沖縄県消防学校がめでたく開校50周年を迎えられることとなり、心よりお慶び申し上げます。また、消防学校開校50周年記念誌の発刊にあたって、私の消防学校勤務時代の思い出等を載せていただく機会を下さいまして感謝いたします。

私は、平成４年度の定期人事異動で消防学校に転勤してきました。当時の消防学校は西原町上原にあった旧校舎で、外壁の剥離等老朽化していた上、敷地・施設が狭く十分な教育訓練が行えない等の理由から、中城村北上原への移転整備が進められていました。

その西原校舎では約５年勤務しました。着任した年に初任教育生に混じって訓練礼式の指導を受け、校外での訓練の引率で、学生が分乗した消防車両を連ねて国頭へ野外訓練に行ったり、日本赤十字社の水上安全法講習のため同じく消防車両を連ねて奥武山プールに行ったり、訓練や行事で学生達と行動を共にしたことなどが懐かしく思い出されます。

初任教育生が９月に卒業すると、救急Ⅱ課程の実施に追われていた感があります。当時、現職救急隊員への補充教育である救急Ⅱ課程への需要が高く、年に２回実施した他、従来の救急専科（Ⅰ課程）に代わり救急標準課程も隔年で実施したので、年に３回の救急教育を行う年もあり、中城新校舎に移転するまでに12回もの救急教育が行われました。

そして、中城新校舎への移転となりその後約８年勤務しました。平成９年４月に新校舎に初めての初任教育生を迎え担当教官を務める傍ら、新たな施設での教育訓練の実施方針や運営管理上のルール作り等の整備を進めました。また、当時の校長や本庁主管課の尽力により教官体制も充実しました。それまでは２人だった派遣教官が年次的に４人まで増員され、消防長の方々のご理解ご協力の下、教官体制は年を追って充実していったように思います。

一方で、台風被害も多く屋内訓練場の屋根が吹き飛ばされ大掛かりな補修工事となったこともありました。平成13年には、台風の大雨で訓練塔後方の斜面が真夜中に大規模に崩壊し、翌朝その光景を目の当たりにした時は途方に暮れたものです。年度内に何とか復旧工事は完了したものの、その後も訓練塔施設周辺で地下水の影響が止まらず、地下訓練室への漏水を処理するために苦労させられました。また、平成12年の九州・沖縄サミット消防特別警戒では消防学校が県外応援隊の宿泊所となり、特別警戒の結団式で屋外訓練場に応援隊の何十台もの様々な消防車両が集結し、東京消防庁の消防ヘリが訓練場の芝地に着陸した時の光景は実に圧巻で強く印象に残っています。その他、消防学校勤務時代に多くの方々と出会い様々な経験をさせていただいた13年間の思い出は尽きません。

結びに、消防学校がこれからも校長以下職員の皆様のご活躍により益々発展・充実し、県内消防職・団員の知識技術向上の拠点となりますよう祈念いたします。

県外視察研修での筆者（左から２番目）
（平成９年）

サミット消防特別警戒で集合した県外応援隊
（平成12年）

我が消防人生

元教官
元沖縄市消防本部
消防長　仲宗根　繁

消防学校開校50周年おめでとうございます。私が消防人生を歩み始めたのは、昭和59年23歳で第16期初任教育への入校が始まりでした。その頃の消防学校は、現在の琉球大学のキャンパスの敷地内にあり、当時は周りには何もなく広々とした土地に長方形の２階建て庁舎が建てられ授業が行われていました。入校中に部屋の窓から見えた建設中の琉球大学病院棟が、卒業前に完成し何もなかった無の空間だった地域に大きな建物となり、急いで各部屋のカーテンを付けた記憶が残っています。その時の学校教官が、後に校長になられた山内正教官で、東京消防庁救助隊出身で使命感が強く若き教官が我が初任教育30名を担当しておりました。消防に関する座学及び実技訓練のほとんどを担当し、朝から晩まで厳しくしごかれた記憶が懐かしい思い出となっています。

卒業後、救急・救助・潜水と全般的な業務に就いていた平成３年に救急救命士制度が発足、その救命士を目指し２年間救急隊専属で活動中、消防大学校救助科に派遣予定の先輩が年齢制限で不許可となり、突然私に派遣が振られ、一晩考えた結果入校を決意、それが消防人生37年の中で教官職へと道が開けることになることは夢にも思いませんでした。平成９年８月の消防大学校救助科入校、圧倒的な技術の差を感じながらも必死に勉強し、それを厳しくかつ優しく見守る教官の姿に感動を覚えたものです。卒業後は基本を重視する救助技術を取り入れた訓練に力を注ぐ中、学校教官派遣の話が浮上、その時代の教官の条件が、「消防大学校を卒業したもの」となっていたため私に派遣の打診があり、少々悩んだ結果、平成13年から２か年間の出向を決意、初めての教官生活が始まりました。この間、消防大学校の教官の立ち振る舞いを思い出しながら救助・礼式・ポンプ操法・座学を受け持ち、教える側として学生以上に夜まで必死に勉強したものです。その時、県内各地の消防本部から派遣されていた教官との絆は今では大切な財産となっています。２年間が終わり復職後、平成20年本市派遣の教官が１年を残し止むを得ない事情で帰任、残り１年の任期を再び受け持つこととなり再度教官生活が始まりました。２度目ともあり、入校中の学生とも積極的に交流、（飲み会含む）、多くの優秀なる消防官との出会いも良き思い出となっております。

その後、平成27年消防長を拝命、４年間は重要な経験をさせていただきました。振り返りますと、これも学校教官を悩みながらも決意したからこその人生であり、大変貴重な経験をさせてもらったと心より感謝しております。

今後、本県の消防行政は防災ヘリ導入にかかる高度な教育を始め、多様化する災害への対応能力の向上や、崇高なる消防官育成の推進とともに、災害のない住みよい安全な沖縄県を担う貴校の使命感を揺るぎなく邁進していただくとともに、貴施設の益々のご発展を祈念してご寄稿とさせていただきます。

職員室で講義の合間にくつろぐ筆者（中央）
（平成13年）

第34期初任教育野外訓練での筆者
（平成14年）

消防学校への感謝とメモワール

元教官
久米島町消防本部
消防長　**新垣　健**

消防学校開校50周年を迎え心からお祝い申し上げますとともに、記念事業の一貫として記念誌が発刊されるにあたり、寄稿の機会を与えていただき感謝申し上げます。

私は平成13年４月から平成16年３月までの３年間、派遣教官として本校での教育訓練に携わることとなりました。

当時、消防学校へは学生として入校した経験はあれ、まさか自身が教官として消防学校への辞令を受けるとは微塵の思いもなく、また私のモットーは常に現場オンリーであり、教官としての自身を想像すらできませんでした。上司から派遣の話を頂いてから数日で回答するよう迫られた私は、熟慮の末、この機会を人生の分岐点と捉え一大決心したことが今でも脳裏によみがえります。

私が消防学校に着任するまで救急関係を担当する派遣教官はおらず授業の大半を外来講師（医師・消防）が担っていました。担当教官は県職員という事もあり救急関係の専門的な知識・技術がない状況のなか、外来講師の調整や学生をまとめる事は至難の業で当時の苦労は察するに余りあるところです。

着任後、私は県職員である前任者から事務要領や講師調整要領等の引継を受け、これまで経験したことのない作業に連日残業も当たり前、学生の受け入れ準備と併せ授業計画やレジュメの準備に加え、初任教育等の実科訓練の補助に就くなど毎日が慌ただしく、特に救急標準課程時の生活は、授業の準備が追い付かず、週１ペースで学校に寝泊りする始末で、日々重責を感じていましたが、それとは裏腹にこれまで得たことのない充実感を覚えたのも事実でした。今振り返れば、当時の教官一人一人が専科等の担当教官となり授業を受け持ちながら残業はすれ、寝泊りする教官はなく涼しい顔で毎日の授業をこなす姿が１年目の私とは比較にならないほど優秀で憧れさえ抱いたことを記憶しています。

さて、私の教官生活の中での思い出といえば、屋良校長がプール横の畑で丹精込めて育てたアセロラ、パッションフルーツの収穫や体育館後方の広大な斜面で飼育したニワトリの卵の収穫、校内の環境整備等、屋良校長を筆頭に空き時間は忙しく走り回ったことが脳裏に蘇ります。

また学生達との懇親、学校職員との飲み会、特に教官との飲み会では学生の指導方法について熱く語り合ったことが懐かしく感じます。

当時、教官のなかで最年少だった私は現在も現役で消防に勤務していますが、同僚教官のほとんどが勇退するなか、平成14年度から共に教鞭を執った大村教官は肉好きと言うこともあり、何度かステーキのおいしい店を探して食べに行ったことが思い出されます。そうです、何を隠そう現在の大村朝洋校長であります。当時の大村教官とは何度も残業しながら学生の指導方法や授業の進め方などを議論したものです。今でもプライーベートで親交があり私の盟友と言っても過言ではありません。

とりとめのない回想ではありましたが、結びに近年、複雑多様化、激甚化の一途をたどる災害に対し、消防職員はこれまで以上の知識・技術・体力・精神力が求められるなか、消防学校の果たす役割は今後ますます重要になる事は言うまでもありません。消防学校の更なる発展を祈念し感謝の意を込め、私のメモワールといたします。

竹富町黒島での移動消防学校で蘇生法を指導する筆者（右側）
（平成14年）

第35期初任教育体育祭教官チーム（前列左から２番目が筆者）
（平成15年）

50周年に寄せて

元教官・元舎監
元宜野湾市消防本部
次長兼署長　米須　清昌

沖縄県消防学校開校50周年おめでとうございます。この記念すべき年に沖縄県消防学校との関りと、学校が果たしてきた役割について寄稿できることを光栄に思います。

私が消防士を拝命したのは昭和53年でした。その頃は沖縄が本土復帰して６年が経過した時期でした。車両は右側通行で消防車両も右や左ハンドルが混在していて運転に苦労したことや色々なものがアメリカ統治時代の名残として残っていました。

本来ならば採用されてすぐ消防学校に入校し、初任科教養課程で基礎知識や基本的な技術を習得しなければならないのですが、学校に派遣されたのは５年後となりました。

それは消防学校が昭和49年に開校されたために、先輩方が学校入校の順番待ちをしていたのと、我如古出張所開所のため人員確保が優先で少人数しか学校派遣されなかったなどの事情があったからです。

当時の消防士養成は、現場での実践を中心に、技能の習得を目指していました。しかし、一方で科学的根拠に基づいた消防戦術についての知識や理解は不十分で、現場での対応力もまだまだ不足しており私としては、学校入校を熱望していました。

いよいよ学校入校が許可されたときは、飛び上がるほど嬉しく思いました。

私は、昭和58年に沖縄県消防学校での初任教育教養の研修を受け、実際に学ぶことで、消防活動に必要な基礎知識や車両運用方法を学び、火災想定演習など、現場では学びにくい知識と技能を身につけることができました。この経験が私にとって大きな刺激を与え、将来的には沖縄県消防学校での教官になることを夢見るようになりました。

夢がかない私は平成13年に沖縄県消防学校に教官として派遣されました。消防学校は手狭となった西原町の施設から現在の場所に移転しており、広大な敷地に他府県にも勝るとも劣らない近代的な施設が出来上がっていました。私たち教官は、学生が消防士としての理論的な知識や技能を学ぶのに必要な環境を作り、彼らが現場での実践経験を積んでいくことができるように支援することを念頭に教えていました。そのため消防署と同じように資機材を車両に積載して、いつでも現場出場できるような環境づくりをしていました。そんな最中、通行人から「消防学校の南側の原野が燃えている」と駆け込み通報があり教官４名でポンプ車により出動し、初期消火を行いつつ所轄の中北消防に引き継いだことが今でも忘れられない思い出となっています。

平成31年に消防本部を定年退職後、舎監業務で後輩育成に従事することになりました。そこで指導した学生たちは勉強熱心で、各自課題を持ちそれに向けて一生懸命学んでいました。これもひとえに歴代学校長や教職員の献身的な指導の賜物だと思います。

結びに、これからも沖縄県消防学校が県民の生命財産を守る消防の要として発展継承することを祈念申し上げます。

教官時代の筆者
（平成13年）

第33期初任教育謝恩会で（右から３番目が筆者）
（平成13年）

舎監時代の筆者
（平成31年）

消防人の道としての成長拠点と原点回帰

現初任教育担当教官
米須　繁

この度、沖縄県消防学校開校50周年を迎えられましたことに、心からお慶び申し上げます。また、これまで沖縄県の消防行政を支え発展させてきた先人の皆様のご尽力に深い尊敬と感謝の意を捧げます。

私は、平成24年度から３年間、宜野湾市消防本部からの派遣教官として努めさせていただきました。その後、令和２年度から沖縄県職員として採用され、沖縄県消防学校の教官として、日々の経験を通じ、学生たちと共に成長し、使命を担う方々の育成に携わっています。この学校は私にとって、誇り高い場所であり、多くの思い出が詰まっています。

私が消防職員として採用されたのは平成７年１月５日でした。採用からわずか約２週間後の１月17日、阪神淡路大震災が発生し、兵庫県に在住している姉とも連絡がつかず不安の中、震災による倒壊した建物や高速道路、密集した住宅地上空一面を黒煙が覆う火災現場映像を目にし、遠い沖縄から被災地の方々に対し消防職員として何もできなかった無力感を強く心に抱いたことは今も鮮明に覚えています。

私と消防学校との関わりは、採用から３年後の平成10年度第30期初任教育となりますが、訓練で頻繁にお世話になった旧西原校舎や訓練塔、そして平成８年度に中城村北上原に移転された施設においても快適に不自由なく教育訓練に励むことができ、当時からお世話になった教官・職員関係者の皆様に対し感謝の気持ちしかありません。その中でも、初任教育県外視察研修において東京消防庁航空隊の活動に刺激を受け、いずれは沖縄県にも航空隊が発足することを夢見て航空隊員を目指し日々の訓練や体力錬成、現場での消防任務の遂行に励んできました。消防人生を歩んで行く中で、幸運にも救急救命士養成所、消防大学校などへの派遣と様々な経験をさせていただきました。また、偶然と奇跡にも恵まれ派遣教官、そして沖縄県職員としての立場となった現在、これまでの経験を活かし、この学びの場で学生たちとの交流を通じて、日々新しいことを学んでいる私自身を不思議に思うと同時に、ご縁があって支えてくださり導いてくれたすべての方々に感謝しています。この幸せな消防人生において、初任教育をはじめ学生の情熱と意欲は、私にとっての原動力であり、彼らが夢を追いかけ成長し、地域社会に貢献する様子を見ることは何よりも喜びとなっています。

沖縄県消防学校は、専門知識と技術の修得だけでなく、心の成長と思いやりを大切にする場所でもあり、人間力の向上と消防人としての基礎の構築も奨励しています。その結果、ここから卒業した方々は、チームワークと地域社会に対する思いやり、そして「消防精神に誇りをもって、地域住民の安全と安心を守る」使命を果たしています。人を想う気持ちと感謝の心を学生から教わり、そして私自身の成長へと繋がります。まさしく、この場所が消防人の道としての成長拠点であり原点回帰できる場所であると深く実感し、この気持ちが使命に対する情熱をさらに高めています。

結びになりますが、今後とも皆様の沖縄県消防学校教育へのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。また、沖縄県消防学校が益々の発展を遂げ、地域社会に尽力し、思いやりと感謝の心に溢れる場所であることを心より祈念いたしまして寄稿とさせていただきます。

第54期初任教育ハブ対策講義中
（令和４年）

大村校長・赤嶺副校長と教官集合
（後列左から２番目）（令和２年）

富永前教官と
（令和２年）

第55期初任教育を終えて
～災害は必ずやってくる～

令和５年度初任教育（第55期）卒業生
総代　**赤嶺　輝**
（豊見城市消防本部）

沖縄県消防学校開校50周年おめでとうございます。

半年間の訓練計画を終え、消防吏員としての基礎的な知識や技術をはじめ、消防という仕事は危険が多く、また人の生死に関わる重要な仕事ということを学び、使命感や責任感がより一層高まりました。日々の座学では、理化学や建築、消防英語などを学び消防という仕事の幅広さ、技術だけではなく知識の修得の大事さを感じました。

屋内訓練場就寝訓練や、災害対応訓練では、いつ起こるかわからない災害に備え夜中に非常招集訓練があり、「災害は必ずやってくる」という教えの元、訓練を行いました。就寝訓練では、指令が入ると迅速に防火衣を着装し、活動を行いました。夜中に出動する想定ができて、昼間とは違う身体の感覚に戸惑いながらも活動を行い、深夜に活動する厳しさを身をもって感じることができました。災害対応訓練では、訓練前に日本の災害映像を見て、自分たちは今から災害現場へ出動し、要救助者を救出するという使命感にかられ、消防吏員を目指した頃の思いを振り返りました。近年多発している大規模災害を想定した実践的な訓練を行い、夜通しで土砂や瓦礫の中に取り残されている要救助者の検索活動を行いました。何度も心折れそうになりましたが、我々がやらずに誰がやるんだという強い気持ちを再確認し、強い精神力を養うことが出来ました。また、待っている家族や要救助者の気持ちを考えることができた訓練になりました。

寮生活では、体の疲れを次の訓練に残さないために互いにマッサージをし合い、心を癒すためにマイナス発言を避け、それぞれの思いなどを語り合いました。

このような濃い半年間を過ごすことが出来たのも、ひとえにこれまでご指導していただきました学校長をはじめ副校長、事務員の皆様、体調を気遣い、優しく時には厳しく指導してくださいました舎監の皆様、いつも素敵な笑顔で栄養たっぷりの食事を作ってくれた食堂の方々、そして、何よりも私たちのことを一番に考え、指導して頂いた教官方のお陰です。感謝してもしきれないのですが、第55期初任教育一同、心より感謝申し上げます。

一日でも早く、住民をはじめ上司や先輩方から信頼される消防吏員になることで教官方に恩返ししたいと思います。また、消防学校で修得した厳正な規律の保持、知識と技術に磨きをかけ、体力と気力の錬成に励み、地域住民の安心安全のために全身全霊で職務を全うします。私たちの消防人生は始まったばかりであり、これからも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

耐久走訓練で先頭を走る筆者
（令和５年８月）

卒業式で卒業生答辞を行う筆者
（令和５年９月）

昼食中くつろぐ筆者
（令和５年）

私が過ごした沖縄県消防学校

令和５年度初任教育（第55期）卒業生
副総代　**大城　優衣**
（中城北中城消防本部）

この度、沖縄県消防学校が開校50周年を迎えられたことを心よりお祝申し上げます。記念すべき節目を迎えるにあたり、記念誌への投稿の機会を与えていただいたことに対し、誠に光栄に思います。

私が沖縄県消防学校に初めて入校しましたのは令和5年度の第55期初任教育になります。私の地元である中城村に消防学校があるのは小さいころから知っており、消防を目指したころから体力錬成とモチベーションを高めるため毎回消防学校の目の前の道路をランニングしていたことを懐かしく思います。その度に日々訓練に励む先輩方の姿も見てきました。私自身、消防学校に入校し先輩方と同じように訓練することができていることに誇りを感じております。

第55期初任教育では、副総代を務めさせていただきました。55期の中では最年長であり、みんなを引っ張っていこうという気持ちでさせていただきましたが、女性の私ができるだろうか、みんなをどうしたらまとめることができるのかなど、とても悩みました。ですが、赤嶺輝総代（豊見城市消防本部）や玉城友基副総代（名護市消防本部）にも支えられ、半年間過ごすことができました。この半年間はきついこと、辛いことなど沢山ありましたが、学生たちにも支えられ、一致団結し、最高の半年間、最高の仲間たちに出会うことができました。その中で思い出に残ることは、夏の屋外就寝訓練で初めて校庭にテントを広げ、就寝訓練をしたことです。虫が沢山おり、鳴き声も聞こえ、暑くてとても眠れませんでした。その中での訓練は精神的にもきつかったのですが、この訓練の大切さを感じることができました。皆で列になりテントを広げ、就寝したことが懐かしく貴重な思い出になっています。また、訓練後の寮室では同じ部屋の女子学生とたわいもないお話をしたり、舎監の方々とお話をしたり、寮室には毎日笑いがあり楽しく過ごすことができました。ありがとうございました。

その思いができたのも、学校長はじめ、副校長、主幹、教官方、事務員の方々、舎監の方々、食堂の方々、関係者の方々のおかげであります。特に米須繁教官をはじめ、教官方は朝早くから夜遅くまで私たちのために考えてくれ、そして厳しくご指導していただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

今後は、本校での経験や訓練を活かせるよう、所属である中城北中城消防本部で地域の方々に少しでも恩返しができるよう努めていきたいと思います。また女性消防吏員としての役割を果たし、幅広い活動ができるように頑張っていきたいです。

何か悩んだ時や壁にぶつかった時、その時以外でも本校の目の前の道路をランニングし、本校での思い出を振り返りながら、原点に戻り日々向上していきたいと思います。

今後も沖縄県消防学校の益々の御発展を心から祈念し、寄稿文とさせていただきます。

耐久走訓練で先頭を走る筆者
（令和５年８月）

校外実務訓練での女性チーム（中央奥が筆者）
（令和５年８月）

卒業式で副総代としての表彰状を受領する筆者
（令和５年９月）

山内イズムと昔良き時代
～峠の茶屋～

元教官
那覇市消防局西消防署
署長　新城　敏行

沖縄県消防学校開校50周年おめでとうございます。

そして、開校以来、今日の消防学校の礎を築くため、ご尽力いただいた関係者の皆様に対して、感謝申し上げるとともに、心からのお祝いを申し上げます。

さて、私と消防学校とのかかわりですが、平成元年の旧西原校舎での第21期初任教育、平成10年現在地での第３期救助科の専科教育、その後、縁あって平成25年４月から平成28年３月までの３年間については、派遣教官として、学校教育に携わらせていただきました。

特に、派遣教官としての３年間は「教育するということは、教育されることである。」ということに気づき、事に当たっては勉強し、消防幹部として成長した期間でした。

というのも、平成25年度の消防学校長は、皆さんご存知の山内正さんでした。

山内さんは、消防学校開校後、消防実務全般に精通した県職員教官の配置が必要とされたことから、昭和52年５月に東京消防庁から割愛採用され、消防学校での消防教育訓練を中心に、県庁での防災業務の全般に携わり、消防防災行政の的確な推進に尽力されたことは、県内消防関係者であれば、誰もが知るところです。私も、派遣教官主幹として、「消防職員及び消防団員の教育訓練を通して市町村消防の厳正な消防組織の確立、精強な消防部隊の育成を目指す。」という、「山内イズム」に共感し、消防教育の使命達成に邁進できたことは、大切な財産となり、その貴重な経験を所属消防での教育や訓練に活用するとともに、人材育成の観点からも教官派遣について、継続していかなければと考えております。

さて、現中城校舎においては、車両及び訓練施設が一定程度整備されており、教育訓練の実施にあたり、特段支障は生じないと思いますが、旧西原校舎については、車両や訓練施設がお世辞にも十分とは言い難く、学生の人数が寄宿舎のキャパを超えた場合、「仮屋内訓練場兼倉庫」と称するプレハブ小屋の一部を寄宿舎として使用させるなど、学生には、不自由な面があったと記憶しています。

また、当時のエピソードとしてですが、旧西原校舎の校庭は狭かったため、夕方の自由時間の際に、校外をランニングすることは認められており、学生は、校外において、体力錬成に励んだものですが、実は、校舎の近くに通称「峠の茶屋」なる小さな売店が存在しており、ランニング後に校舎に帰ってきた際、短パン姿の学生の顔が紅潮しているのは理解できますが、不思議なことに、ジャージなどの軽装で帰ってきた学生の顔が紅潮している場合もありました。

約34年前の出来事ですので、理由につきましては、「昔良き時代」として、皆様のご想像にお任せ致します。

以上、個人的で、とりとめのない記述となりましたが、消防学校は、これからも、様々な教育訓練を通して、使命感に燃えた強固な精神と共同精神の涵養を図り、もって住民に愛され、信頼される優秀な消防人の養成に邁進するものと期待しています。

第45期初任教育謝恩会で（平成25年）

消防学校送別会で（１列目右から３番目が筆者）（平成28年３月）

私の原点
～プレハブメンバー～

平成５年度初任教育（第25期）卒業生
ニライ消防本部北谷消防署
署長　**比嘉　秀樹**

このたびは、沖縄県消防学校が50周年を迎えられたこと、心よりお喜び申し上げます。我々、25期初任教育生は、平成５年４月に消防学校の門をくぐりました。消防学校は、私に消防職員としてのあるべき姿や責務、節度、住民を守るとはどういうことかを徹底的に叩き込まれた原点といってもいい場所であり、今も交流が続く仲間と出会うことができた思い出深い場所でもあります。

当時の消防学校は、現在の県立埋蔵文化財センターの場所に校舎（講義室と宿泊施設）と訓練塔がありました。これまでの入学者数は40～50名前後でしたが、完全週休二日制の導入に伴い各消防本部が採用人数を大幅に増やしたため、25期は63名という大所帯でした。入学初日、私を含めた数十名は、なぜか校舎ではなく、運動場に向けて校舎の階段を下り、体育館よりやや小さいサイズの平屋プレハブへ誘導されました。そのプレハブはワンフロアで、トレーニングマシーン一式と何もない広いスペースの不思議な空間でした。驚いたことに区切りも壁もない広いスペースが私達15名の宿泊場所となり、両側１列に布団を並べた雑魚寝だったのです。今では想像もできない環境の中での初任教育生活が始まりました。講義、食事、入浴、所属消防や家族からの電話対応は全て校舎内でしかできなかったため、一日何回も階段を上り下りしなければならず、若くて体力があるとはいえ、訓練のあとは足が重く息を切らせた時もありました。さらに、プレハブならではの苦労もありました。それは就寝時です。雨が降るとトタン屋根からパラパラと大きな雨音が鳴り、加えて両隣の同期生のイビキや歯ぎしりに寝不足が続いたことは忘れられません。しかし、苦労を共にした15名は団結力が強く、助け合い、協力し合う仲間になりました。所属が別々になった今でもプレハブメンバーで模合を継続しています。不便な環境だからこそお互いを思いやり助け合うこと、苦しい環境だからこそ人の絆は強くなることを実感した貴重な体験でした。

また、消防学校での訓練で印象深い訓練は訓練礼式です。当時の松島教官の指導のもと、炎天下で汗だくになりながら、停止間、行進間を徹底的に繰り返し訓練しました。今でも礼式は身体に深く染み込んでいます。当時は、訓練礼式の意義が理解できていたとはいいがたいですが、経験を積んだ今では、一刻を争う緊急時に統率のとれた活動を行うために、かつ厳正な規律を身につけるためにも必要な訓練だと感じています。

当時の校訓は「人格の陶冶、技術の錬磨、親和と明朗」でした。卒業して30年たった今、この校訓は、私の消防職員としての根幹の考え方となっています。消防学校で培った品位、節度はもちろんのこと、仲間を思いやる気持ち等は、日頃の業務に生かされています。

最後になりましたが、沖縄県消防学校の益々の発展とご活躍を心より祈念いたします。

救助訓練後のプレハブメンバー集合写真
（前から２人目が筆者）
（消防学校前グラウンド）（平成5年10月）

屋外訓練中のロープ結索訓練
（県民の森）（平成5年８月）

50周年に寄せて

平成15年度初任教育（第35期）卒業生
那覇市消防局
西消防署小禄南出張所
所長　當山　英里

このたびは、沖縄県消防学校開校50周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

さて、私が最初に沖縄県消防学校に入校致しましたのは、平成15年４月から10月までの半年間（第35期 初任教育）になります。総員41人（うち女性３人）という環境の中、初めての寮生活や各種訓練がとても新鮮であり、女性専用の寮室で過ごした日々は消防吏員に拝命され20年を経過しても、鮮明に覚えています。

初任教育で学ぶ教科目があらゆる分野にわたり、各種実技訓練を経験していく中で、消防吏員として身に付けなければならない教養の多さから、市民の負託にこたえることができるのかと不安になることもありました。その不安を自信につなげるために、学校内の図書室を利用し仲間と勉強したり、同じ那覇消防の仲間と夜遅くまで実技訓練をしたことが、今となっては自己研鑽という形で、疑問に感じたことを掘り下げて調べたり、市民の立場になった際にどのように消防が活動しなければならないのか？！と検討する原動力になっています。

今般、技術革新による社会環境の変化に伴い、消防を取り巻く環境についてもあらゆる変化に対応しなければなりません。沖縄県消防学校の教育基本方針には、「社会情勢の変化や技術の発展に的確に対応するための消防職員・消防団員及び消防関係者の資質を高めることを目指している」とあります。消防吏員として拝命されたばかりの初任教育から現任の専科教育、さらに消防団員の教育と限りある人材が沖縄県消防学校で育成され、一人ひとりが能力を発揮し、安全かつ能率的に業務遂行のできる「人が育つ」ことで、沖縄県内の消防にフィードバックされ、それが沖縄県の安心・安全につながり、そして消防吏員の使命や目的が強固なものとなって、自身を鼓舞する原動力の礎になることと存じます。

最後に、沖縄県消防学校が今後さらに充実し、ますます発展されますことを心よりお祈りいたします。

県民の森（平成15年）
（一番奥が筆者）

卒業式前ポンプ操法訓練（平成15年）
（右側で鳶口を携帯しているのが筆者）

卒業式に車庫内で（平成15年）
（中央の女性２人のうち左側が筆者）